

教育講演

看護の本質は1つ—響き合い拡げよう優れた看護を

Resonate with and expand excellent nursing, Because the essence of nursing is one

川嶋 みどり

Midori Kawashima

はじめに

看護は、人間の生命の尊厳と患者中心の思想のもとでの全人的なアプローチにその特性がある。病気や障害、年齢の如何を問わず、受け手の自然治癒力に働きかけ、可能性を引き出してQOLを保障するという源流を遡れば、19世紀のナイチンゲールに辿りつくことができる。現代看護師の責務は、看護が直面しているさまざまな現実を直視し、ここに至る道に思いを馳せて、将来への展望を切り拓くことである。そのためには、改めて看護を深く知り、看護を愛することが必須であると思う。

そこで、宮本百合子が、レオナルド・ダヴィンチの「知は愛の母」という言葉に触れて述べた1節を深く心に刻みたい。それは、「私たちは、どんなことにしろ、そのものの意味を知らなければ、それを大切にしたり愛したりすることはできない。現実を理解しなければ、それを愛し、そこに働きかけてゆく人間の歴代の受け継ぎ手として、今日生きている喜びや感動を味わうこともできない」(若い娘の倫理-1940)というのである。

看護師の社会貢献は看護実践を介して行われる。従って先ず、臨床に軸足を置き「受けて目線」「暮らし目線」で実践量を増やすことが求められる。たとえ1人の、どのように小さなものであっても、優れた看護実践のアウトカムを決して過小評価してはならない。言語化した経験知は、共鳴し合う看護師たちが共有し、やがて看護学の根拠となる仮説に通じるのだから。

職業としての看護歴史概観

日本の看護師の組織的養成は、明治初期の医制公布10年後に始まったが、独立した業であるとの認識を当事者も社会も持ち合わせぬまま戦時に突入し、自他ともに医師のアシストをする職業とされて50年の歳月が続いた。曲がりなりにも専門職としての道が拓かれたのは、太平洋戦争の敗戦を機に連合軍の占領政策の一環としての諸改革による。なかでも、保助看法の公布が「看護の夜明け」と受けとめられたのは、戦前からの看護師の社会的地位と資格を一新する内容であったからに他ならない。こうして「療養上の世話」が「診療の補助」と並び二大看護業務と位置づけられたが、これが看護独自の機能であるとの意識化は、60年代に入ってからV・ヘンダーソンの「看護の基本となるもの」のインパクトによってであった。前後して病院の新・増築が進み、看護師の権利意識の高まりも加わって看護師不足はピークとなり、あらゆる矛盾が顕在化した。

さらに、医療技術の発達と高度専門分化が進むなか、看護は、否応なしに(狭義の)医療を支えるマンパワーの役割に傾き、とりわけ臨床現場の看護師らは、果たすべき役割と日常業務内容との葛藤、すなわち「本当はしなければならぬけどできない」という言葉をつぶやき続けて今日に至っている。実際には、看護の働きゆえの多大な社会的貢献(乳幼児死亡率の低下、感染症発症予防、周術期のケアによる高度手術の成功など)の実績も豊富であるというのに。

医療技術の進歩は急テンポである。生体情報の飛躍的増大と高速処理、蘇生術のシステム化、高度化

を始め、遺伝子操作、ヒトゲノムの解明、ips細胞の出現による再生医療の可能性など、この先一体どのような技術が出現するのか、医療現場や看護はどうなるのか、受け手の人々への影響はどうなるのかなど、予想を遙かに超えて進んでいる。だが、手術手技、臓器移植、遺伝子操作などの技術の進歩は、いずれも人体の物質化（モノ化）の促進に他ならないことに気づく。

対する看護は、人間の身体・心理、生活行動、社会、スピリチュアル面を統合した全人的アプローチを本命とするため、医学の進歩とは全く相容れない面をもっている。にも関わらず、近年の看護は、あまりにも医療技術の流れに偏り過ぎてはいないか。その結果、看護そのものの価値すら忘れ去られようとしている事例も数多い。このような事象への危惧感や懸念が述べられていることにも耳を傾けねばなるまい。

医療機器の介在が看護の変容に

高度医療のもとで働く看護師らは、医療機器の操作と出力データの読み取りに習熟するためのトレーニングに集中して、機器装着による同一位体の苦痛や、コード類による拘束感など、患者の不安に気づく感性が鈍くなっていると思われる。既に20年以上前に、M.サンデロウスキーは、「五感と身体ツールの延長としての道具（聴診器）を排除し、モニター装置が到来して心電図、ディスプレイなど、画面上の世界で患者監視を行い、機械のもたらず情報の判読・解釈で患者を把握し、結果として新しい種類の、手を用いない看護をもたらした」（2004）と述べている。ジーン・ワトソンもまた、看護の存続に関して「技術革新への追従と経済的欲求の満足に苦闘した末に、看護はヒューマニティから遠いところに行った」と懸念し、「『医学の中の看護』から『看護としての看護』への方向転換こそ、国際的看護の課題であり、成熟した専門職となり得る機会でもある」（2007）と、提言している。

懸念に終わらぬ医療現場の実相

効率優先のもと患者のニーズよりも経営重視の考え方に添って、機械的対応に疑問を感じない医療環境が常態化している。例えば、看護師の身体ツールを用いたバイタルサインズ測定は、何時しか自動血圧計やサチュレーションモニターに変わり、デジタ

ルな数値のみを転記・入力するなど、医療機器の端末に甘んじている姿も珍しくはない。患者に直接触れずにキーボードをたたき指。療養上の世話は誰にでもできるとして省略し、やがて放棄して無資格者に委譲する傾向を、診療報酬誘導のせいのみにしてよいだろうか。

見逃せないのは、最も患者の身近にいる看護師らが、行き過ぎた医療安全に異議を挟まず、患者の尊厳の脅かしにすら手を貸す状況である。余りにも日常化しているため問題視すらされていないが、リスクマネジメントの名のもとに、バーコードでの本人確認を始め、機械的な氏名呼称の反復など、とても個別の人格を尊重した接し方とはいえない。「乳がん手術で4日間病院滞在中、3度の食事配膳のたびに氏名と生年月日を言われた」という患者。しかし、何をどれだけどのように摂取したかのチェックは皆無であったという。そればかりか、リスク回避のために何もしないことへの組織的な舵取りさえ行われている現状があり、専門職としての矜持のゆくえさえ危ぶまれる状況がある。

看護の価値とは

ナイチンゲールは、「われわれは果たして病院で患者をケアしているであろうか」（1880）と問うたが、看護師ならだれでも「ケアしているのは当然」と思っているだろう。だが、良心的に自問すれば、日々の行為がケアを意味しているとはいえないのではないだろうか。ナイチンゲールの問いに対する、確かな「Yes!」があつて初めてこれからの看護への人々の信頼につながるとさえ言える。どのように医療が高度化しようと、この問いの真意を忘れまい。

さらに彼女は「看護師は看護に専心すべき」と述べている。看護師であるからには、看護に集中するのは至極当然であるのに、この言葉の何と新鮮なことか。それほどに、現在の職場は、看護師が看護に専心できる環境ではなくなっている。

そもそも看護という営みは、人々の暮らしの中から生まれ、“生命を維持・継続する日常的、習慣的ケア”（マリー・コリエール、1980）である。朝の目覚めから就寝までのごくありふれた日常ケアの反復こそ、人間が人間らしくあることの証であり、個別の社会的背景や個人的習慣を配慮したケアにより、その人らしさを表出することに通じる。幼い頃から身についた個別の習慣的営みを自分らしく行う

ことができることこそ、尊厳ある生への保障にほかならない。しかも、そのケア技術自体が最高の治療（苦痛なく安楽で安全・安心）をもたらすことは、幾多の経験知からも明らかである。たとえば、熱湯に浸してしばったタオルを用いた温熱刺激による効果は看護独自のものである。このほか、過去の心地良い体験的エピソードが記憶や言語回復をもたらした例も少なくない。

今だからこそ、優れた看護実践を

高度医療の名のもとに機械化が進み、市場原理に支配された医療が求められる中、超過密高速回転の看護現場で求められる看護師の能力と基礎教育の乖離の大きさははかりしれない。新人の早期離職や看護師のバーンアウトにも通じ、こうした状況では、看護実践の達成感の得られようはずはなく、看護師、患者双方にとって不幸極まりない。そこで、新人に対しては、実践を通して得られる看護の醍醐味をできるだけ早い時期に体験できるような工夫が必要である。

周囲の環境がどんなに厳しくても「看護は看護である」ということを忘れるわけにはいかない。いま1度、原点に立ち返って看護のありようと看護師のアイデンティティを問い、個々の看護師が看護の真価を発揮する道を探ってみよう。高度医療技術や複雑な機械操作に熟知することは妨げないが、看護師の五感を活かして、専門職としてのケアを実践することの意味と価値を取り戻す必要がある。療養上の世話が生命を維持・継続する日常的習慣的ケアであり、誰もが人間らしく自分らしく生きていくことを可能にするとともに、心身の苦痛緩和や不快・不能を改善する効果があることへの、揺るぎない確信を持つことである。その鍵は、優れた看護実践、すなわちレベルの高い能動的な実践にある。

優れた看護実践に関して何より重要なことは、受け手にとって有用な実践であること。たとえそれが1回限りの経験であっても、後日、あの時のあの実践（経験）と同じ種類の事例として思い浮かべることのできるレベルの実践をいう。やがてそれらは、新たな知見に通じる仮説を生み出す契機にもなり得るからである。優れた実践のアウトカムは多彩であり、どのような悪条件下であっても起こり得るリスクを防ぎきる。優れた実践の結果の多くは何ごともし起こらないが、これこそまさに看護の本質といえよ

う。本質は本来不可視的なものである。

看護先導の安楽性を病院文化の柱に

患者の尊厳を第一義にした安楽性の哲学を病院文化のもう1つの柱にすることで、行き過ぎた医療安全を是正することが可能になると思う。安楽性の概念は看護独自のもので医学の範疇にはない。そこで、看護師主導でこれを行うのである。患者のQOLを高め、家族の信頼を回復し、看護師のアイデンティティにも役立つことは間違いない。具体的には、患者のそばにいて、積極的傾聴と手を用いたケアの実践をすることである。その結果、患者の身体のコミュニケーションチャンネルが開放され、学習の好機となることは間違いない。

先人たちの考える安楽を概観すると次のようである。

- ◎ナイチンゲール：生命力が解き放たれた兆候の1つである。
- ◎大関和：患者に与える心身の平和は快癒を促す。常に身体を清潔にし夜具類は空気に触れさせる。
- ◎リアディア・ホール：清拭、食事、用便、衣服着脱、体位、移動などの他、環境の保持などを含み、患者の身体に手を当てること。安楽ケアの過程は患者の学習の好機でもある。
- ◎ベナー：落ち着かせたり慰めるだけでなく、力づけたり支えたり、勇気づけたりすること。

専門職を自負するなら看護の正道を歩こう

看護は、有史以来、人間のもっとも基本的な営みの1つであった。そこに人間が存在する限り、何時の時代にもどこの国にも看護行為は存在した。いのちを維持・継続する日常的、習慣的ケアは、暮らしのなかで展開され、病人、高齢者、幼い人への愛と思いやりを基礎に今なお続いている。疾病構造の変化、医療技術の高度化等により、新たな看護の専門性を求める向きもあるが、基本的理念は変わらない。「全ての看護師は有能な臨床看護師であるべき」「臨床現場は仮説の宝庫」「看護研究はよりよい看護実践追求の過程」など、何れも実践を離れた看護の道はあり得ないことを示している。それ故に、臨床に軸足を置いた「受けて目線」「暮らし目線」からの看護実践の量を増やすことこそ、社会的に有用なサービスを提供する専門職の歩く道であることを再度述べておく。

165万人という母集団のもとで、280校を超える看護系大学・学部が存在している現在、個々の実践のハーモニーを響かせ抜けることで、現代医療の諸矛盾を解決する道に通じると思われる。看護師が看護に専念することによって得られるアウトカムを過小評価してはならない。看護技術には医療技術と同等またはそれ以上の効果があることを実証しよう。絶対的医行為は医師本来の主要な業務である。その委譲を受けて看護師の業務拡大することは、看護本来の道から外れていることに目覚めよう。狭義の医療に偏った看護師の特定能力研修は、有用有限な社会資源としての看護を無駄遣いすることにも通じる。看護の力の優位性は、医薬品、医療機器に依存せず、日々のありふれた営みをきちんと行うことで、気持ち良さが得られ（副交感神経優位-免疫力アップ）ることである。プロセスは安全で安楽、アウトカム

は自然の回復過程を調える。まさに看護自体は高度医療を牽引する力を持っているのである。

おわりに

1人でもよい。1日1知に通じる実践を意識的に継続することによるアウトカムを信じよう。小さな実践とそこから得られる喜びが、沈滞した職場環境を活性化する酸素になるのみならず、言語化した実践を共有し共鳴し合うプロセスで蓄積された経験知が優れて看護の学的根拠となる仮説を生むことは、数多くの看護実践事例からも実証できる。

看護に専念できる職場環境と看護師の意識改革により本来の看護を取り戻そう。主体的実践を個にとどめず、相互に響き合う感性のネットワークで広げようではないか。看護師の専門的矜持を担保するためにも。